

---

# 闇の少年ナルバ

takosashi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇の少年ナルバ

### 【Nコード】

N4620X

### 【作者名】

takosashi

### 【あらすじ】

アマンダ国の王子として育てられた、闇と人の間の子ナルバは、自分の運命に従い、本当の母を探すべく、城を旅立つ。しかしかつて崇拜していた兄ゼノンが、「狂戦士の呪い」をかけられ、いずれ追ってくることを知る。魔将軍ゼドーの化身のカラスとともに、ナルバの旅が始まった…

## 序章

そこは、遠くて近い世界。穢れしものの蠢く世界。  
心の闇へと、繋がる世界。

そこで、ひとつの命が生まれつつあった。

「陛下」

忌まわしき玉座へ向かい、魔將軍ゼドーは呼びかけた。

風のような息遣いが巻き起こり、邪悪なる「気」の渦を形作り、  
この世界を統べるものが姿を現した。

それはもし、人間がそこで見ていたなら、やせた老人のように見  
えたであろう。

ただし眼を合わせたなら、たちまち魂を焼き尽くされることは明  
白であった。

陛下と呼ばれたその老人は、豪華なローブを翻して、ゼドーに悪  
の祝福を与え、

「…生まれたか」  
と尋ねた。

ゼドーは王から放射される暗黒の「気」が身体を通り抜けていく  
のを感じながら、

「はい、たつた今、お世継ぎがお生まれになりました」

「あれは昔、余が人間の女に孕ませたもの…世継ぎにはなれぬ」

「どうされますか。魔界にて育てさせるには…」

「それはできぬ。いずれ人間界へと返さねば」

「人間界へ？」

ゼドーはおどろいて顔をあげた。

「人間の母を持つのであれば、人間界でも生きられよう。それは

我らには叶わぬこと」

「はい……」

「人間がわが世界にて生きられぬのと、同様にな」

「陛下、ご命令を」

王は邪悪な笑みを浮かべ、

「ゼドーよ、『囚われし魂』を解き放つのだ」

「な……なんと?!」

ゼドーは王に詰め寄った。

「あれらは、人間にして人間にあらず、憎悪と汚穢に満ちた魂。きつと人間界にて、わが子の助けとなろう」王は言った。

「それで……母親は？」

「クズどもの餌にしてやってもよいが……幼少のうちにはわが子にとつて必要となろう。ともに人間界へと送るのだ」

ゼドーは考えた。もしかすると王は、人間界までも……

「ナルバと名付けよう」

王はそう言って、また暗黒の渦とともに消えた。

## 母と子

人間界の、とある辺境の国…

リータは、ナルバに乳を与えながら、祈るように語りかけた。

「どうか、良い子に育っておくれ…」

母子は、人里離れた森の一軒家で暮らしていた。リータは、ナルバが悪の道を歩むことを恐れていた。

魔界の空気を吸い、あの忌まわしき「支配者」が身体に分け入ってきて、子種を残していったことを、彼女はよく憶えていた。それでも、わが子には人間としての幸せを掴んで欲しい、と思っていた。人間としての自分の生命が、もはや長くはもたないことも、知っていた。

（私が生きているうちに、愛を教えなければ…）  
かつて、夫を殺した暴君を滅ぼすため、「支配者」の力を借りた。その見返りとして、邪悪なる命をその身に宿したのであった。

（ナルバ…）  
乳房に顔をうずめ、すやすやと眠っているようすは、まったく普通の、人間の赤ん坊だった。

（そうだ、誰とも関わりを持たず、ずっとここで、私と暮らしていれば…）

その想いは、突然の、激しく戸を叩く音によって、打ち破られた。「王の命令である！ 開けよ！」

外に、数人の武装した兵士がいるようだった。リータは、もはや逃れられぬものと悟った。王室の魔術師が、早くもこの子の所在を突き止めたのだ。

（神に見捨てられ、闇をさまよう運命…ならばいつそのこと…）  
リータは短剣を握り締め、わが子の胸に突き立てようとした。が、それよりも一瞬はやく、戸が破られていた。

なだれこんで来た兵士の剣がリータの喉を貫き、幼き生命は床に投げ出された。

やって来たのは3人の兵士であった。

「これが…例の赤ん坊か」

そのうちの一人が言った。

「なんといいことはない、ただの人間のようなだが？」

「生かして連れて来いとこの命令。戻るとしよう」

「待て、その前に…」

一人が、動かぬリータに、邪な欲情よこしまの眼を向けた。

「おまえは屍体に欲情するのか」

「死んでから、それほど経ってはおらん」

兵士がリータに手をかけようとしたとき…

雷鳴の兆しのように、辺りがさあつと暗くなった。

恐るべき邪悪さに満ちた瘴気が、3人を包み込んだ。

「ひ、ひいつ！」

3人は逃げる間もなく、黒いかづちに打たれ、骨まで焼き尽くされた。

ゼドーがリータの傍らにいた。

もつとも、その姿は不吉を感じさせるカラスであったが。

（死なせはせん。それが、陛下の命令であるからな）

リータはゆつくりと眼を開けた。喉の傷は跡形もなかった。

「ナ、ナルバ！」

リータは半狂乱になってわが子を抱きしめた。

もはや、愛などなくてもよい、生きてさえいてくれれば…

何かの加護を受けている、ということに気づいた。

口にすることさえはばかられるような、穢れきつたなにかの…

しかし、この子さえ無事なら…  
リータはすぐに旅支度をして、この国を出るべく、家をあとにし  
た。

## 王宮

「…なに、仕損じたと?」

アマンダ王は苦虫を噛み潰したように言った。

側近の魔術師ヘルビラティは、

「小屋の中はもぬけの空にて…3人分の甲冑が残っているのみでございました」

アマンダ王は肥大した身体を揺らし、

「赤子も…女も…いなかったというのだな?」

「…はい」

「むむ…」

「女と赤子は逃げ、兵士たちは殺されたものと…」

ヘルビラティが言うと、王は肘掛に拳を叩きつけ、

「わかっておるわ!」と誰にともなく大声を張り出した。

「なんの力もない、女と赤子に、なんたるザマだ!」

「お怒りはごもつとも、ではございますが…」

ヘルビラティはローブの影から狡猾な笑みを浮かべると、

「あの赤子はおそらく、強力な闇の加護によって守られていると思われます。力づくでは、何人も敵いますまい。ここは、陛下御みずから城中に呼び寄せ、召抱えるのがよいかと…」

「なるほど、それも、そうであるな」

ヘルビラティはひっそりと、心のうちにて嘲笑った。

(単純な男よ…利用するにはちょうどよい。あのお方が成長されるまでは…)

この魔術師こそは、「闇の支配者」が地獄より解き放った、「囚われし魂」の一人であった。

「まだ国境を越えてはおらぬな?」

王は、ヘルビラティに尋ねた。



「御意にて」

「余みずから、出向くぞ。支度せい！」

玉座の周りにいた側近たちは、慌ただしく動き出した。

国境の関所で、なにやら騒がしい事になっていた。

リータとナルバが見つかったことは、言うまでもない。

ナルバを抱いたリータの身なりはみすばらしかったが、どこことなく高貴な雰囲気もあった。

「どうかお通しください。かよわき女ひとりと、乳呑み子でございます」

そう訴え続けるリータを、兵士たちは遠巻きに取り囲み、そこをさらに遠巻きに、関所を通ろうとする民が困んでいた。

兵士たちにはすでに王の命が届いている。まさか斬り殺すわけにもいかなかった。

民衆たちは、

「ありゃなんだ。物乞いの女かい」

「誰が父とも分からぬ子だろう…哀れな」

「それにしても、たいそう美しい女…」

「春をひさいでいるのなら、買ってよよいな」

関所の門の上にとまって、不気味な眼を光らせているカラスに、気づいたものはなかった。

（面倒だな…目立ちすぎている。本来の姿なら、このような関所など、吹き飛ばしてしまうところだが…）

小さな頭には、闇の知性が宿っている。魔將軍ゼドーであった。

（仕方ない。目くらましの術で…）

すると、疾風のごとき馬のひづめの音が近づいてきた。

（あれは…？）

「控えい！ アマンダ国王陛下である！」

兵士と民衆たちは、蜘蛛の子を散らすように、リータから離れた。王は馬から降りると、

「その女、そなたと、その赤子を王宮にて……」

言いかけて、彼の表情が凍りついた。

「そなたは……まさか……」

「お久しゅうございます、アマンド様」

「リータ王女……亡くなられたはずでは……」

家来たちがざわめき始めた。

ひとり……ほくそ笑んでいたのは、ヘルビラティだけであった。

## 支配者の思惑

リータとナルバは、アマンダ王宮へ迎え入れられた。

魔將軍ゼドーの化身のカラスは、

(奴と話をつけておくか)

ヘルビラティの待機している魔術師の部屋の窓にとまった。

ヘルビラティは訝り、

「なんじゃ、このカラスは？」

と、追い払おうとすると、

(我は魔將軍ゼドーなり。『囚われし魂』のヘルビラティよ…)

頭の中に鐘のように声が響きわたり、全身に震えが走った。

「しよ、將軍さま！」

ヘルビラティはあわてふためき、カラスに向かって平伏した。

(大儀であったが…危うく女を殺されるところであったな)

「お、お許しを！」

(その方は、命をかけてナルバ様をお守りするのだ。真の御力に

目覚めるまではな)

「ははっ…重々、承知にて…」

(陛下は、おそらく人間界を収めんとしておられる)

「はっ…それも、また…」

(この世界に戦乱を起こし、悪に染め上げるのだ)

「はい…」

(わたしは、いつでも見ている。怠るでないぞ)

カラスは飛び去った。

しかしヘルビラティは、震えが止まらず、立ち上がれるようになるまで、しばらくかかった。

「この世界がどうなっても、わが子に生きていてほしい…母とは罪深いものですね」

リータは遠くを見るような素振りをした。

入浴し、王族のローブをまとったリータは、生ける宝石のように美しかった。

アマンダ王は、

「ご心配には及ばぬ。リータどの。御子息の力をもってすれば、この世を一つにまとめあげること…」

リータは懇願するように、

「なりませぬ！ あの力は、人の世に災いしかもたらさせぬ」

「しかし、殺人王ラバネ口を滅ぼしたのでしょうか？」

「それと引き換えに、私はあの子を…闇と憎悪を父とする子を生んだ…」

「あなたの望みは？ まさか葬り去ってしまうわけには…」

「あの子に、慈悲と、愛を教えてほしいのです」

「ほう…」

「ごく普通に…世を治める知恵などなくてもよい…優しくさえあれば…」

「よろしい…私にも子がいます。一緒に育てましょう」

「ありがたきお言葉…もう、思い残すことはない。私は、もはや女としての喜びを得ることのかなわぬ、穢れきった女…」

そう言うと、リータは短剣を取り出し、髪の毛をぱっさり切り落とした。

「な、何をなさるか！ あなたは、まだお若い。これから子をもつけることも…」

「いいのです。私の子はナルバひとり…」

リータは寂しそうに微笑むと、

「ナルバが物心つくまで、私は生きていくことはできないでしょう」  
う

「リータどの…」

「後のことを、お願い申し上げます、アマンダ様」

アマンダ王は、呆気にとられたように、ただ見ていることしかで

きなかつた。

## 王子ナルバ

穢れた泉の底でうごめくもの…

それらは何万、何億もの触手を伸ばし、堕ちてくるものの血をすすらんものと、妖しく動き回る…

それら一つ一つに眼があり、穢れし知性の光を放つ…

「はあっ！」

ナルバは飛び起きた。全身が汗に濡れている。

世話係のルウが駆け寄り、ささやいた。

「どうなされました…？」

「また、あの夢を…見たんだ」

「怖かったでしょう…可哀そうに…」

ルウはナルバの頭を撫でて、汗をぬぐいとった。

忌まわしき闇の支配者が、亡国の王女リータに生ませた子…

ナルバはアマンダ王のもとで育てられ、15歳になっていた。

ナルバは母の顔を知らない。闇と交わった罪により、天からのい

かづちに焼かれたとも言われているが、真偽のほどは定かではない。

母リータは、アマンダ王にナルバを託したのち、2年後に死んだ。

もちろんそのことは、ナルバには知らされていない。

出生の秘密を知るものも、ごくわずかであった。

ナルバは年上のゼノンと、兄弟のように育った。

ゼノンは文武ともに優れ、世継ぎとしての素質に恵まれていた。

それに対しナルバは、心やさしく、美しい花を見たり、小鳥とたわむれたりすることを好んだ。

愛と慈悲を教え、城中にて汚れを知らず育てて欲しいという、リ

「夕の遺言どおりであった。  
が、それを好まぬ者もいた…」

「ナルバ、剣の稽古はどうした」

「城の庭に座って書物を広げているナルバに、ゼノンが呼びかけた。」

「兄上…」

「書物ばかり読んでいては、王室にふさわしき英傑の士になれぬぞ」

「でも、剣はひとを殺めるのでしょう？」

「そればかりではない。父上も仰せられた。治世の剣を磨け、とな」

この3歳年上の兄ゼノンも、ナルバの素性を知らない。  
ナルバにとって憧れの兄であった。

「畏れながら、ナルバ様には剣より、魔導のほうが、天賦の才が  
おありかと…」

いつの間にか、ヘルビラティがそこにいた。

ナルバは、その姿を見ると、すかさず大きな兄の後ろに隠れた。

「ヘルビラティか。ナルバはお前を見ると恐がって、逃げてしま  
う」

「これは、ご無礼を…」

「ナルバに、用か」

「はい。ナルバ様もお年頃。お妃さまをお迎えになってもよい頃  
と、陛下の思し召しでございます」

「ふーむ…俺が今の妻を迎えたのも、ナルバと同じ年の頃であつ  
たな」

ナルバは言った。

「ぼくは妃など…」

「まあそう言うな。女といえば世話係のルウばかりでは、真の男  
になれぬ」

ゼノンは笑って、

「女とは、なかなか良いものであるぞ、ナルバよ」  
ヘルビラティは、心の内で、ひそかにほくそ笑んだ。

（このゼノンも、父親と同じ。哀れなものよ。やがて亡きものに  
されとも知らず…）

ナルバをその真の自我に目覚めさせる謀略が、ひそかに営まれて  
いた。



## ルウ

「まあ、お妃を？ それはおめでたいこと」

ルウはナルバのやせた身体を洗ってやりながら、声を輝かせた。

「ぼくは、ルウがいるから、お妃なんていららないのに」

「……」

生まれたばかりの頃から、世話係を務めてきたルウは、ナルバの素性を知る一人だった。

ナルバが妻を娶り、一人前とみなされれば、自分は殺されることも知っていた。

しかしルウは自分の命より、ナルバのことが不憫でならなかった。

（生まれながらに、闇にとらわれているなんて……）

「なぜ涙ぐむの……？ ルウ」

「い、いえ……良いではありませんか？ 可愛い姫君と、仲良く遊べるのですよ？」

「ルウの方がいい」

「ナルバ様……」

「ぼくは、結婚なんかしない。大人にもなりたくない」

「どうしてです？」

「ルウと離れなければならぬから」

「……」

「ルウ……」

ナルバはルウの豊富な身体に、しがみついた。

「……では約束しましょう。ナルバ様が結婚されても、ルウはずっと、お側におります」

「本当？」

「本当ですとも。いつかルウが申し上げましたね、嘘についてはいけないと」

「うん」

「ルウは決して、ナルバ様のそばから離れませぬ」  
「約束だよ」

「ええ…さあ、お召し替えを…」  
あと何日、こうして一日の終わりを、ナルバと過ごせるのか…  
ルウにはわからなかった。

そして二人の様子を窺うように、天窓にカラスがとまっていたこと…

「あれは、15にもなつて、まるで赤子です」

王妃アリサは、傍らのアマンダ王に言った。

王は苦い顔をしていた。

「しかし、悪の道に進ませぬようにとの、リータ王女の遺言であるからな…」

「リータの国はすでに滅び、魔物の巣窟になっているとか…もはや、そんな約束事など、反故にしてもよろしいはず。それに、人というものは、善と悪との狭間に生きるもの。善のみでは、ひとりで生きていくこともできません」

「それはそうだが…」

「あの調子では、妃を迎えても、御することも出来ません」

「では、どうする？」

「あの世話係の、ルウとやらを、引き離すのです」

「しかしあの女は、ナルバの一番のお気に入りではないか」

「だからこそです。子に独り立ちさせる、それも親の愛ではありませぬか」

「うーむ…」

そして、数日後、ナルバが書物を取りに、部屋へ戻ってくると、ルウの姿が見えないのに気づいた。

(洗濯でもしているのかな?)

控えの間を覗いてみても、ルウはいなかった。

ナルバは急に、不安にとらわれた。

（まさか…）

「ルウ！ どこにいるの？」

ナルバは寝室の扉を開けた。

胸を赤い血に染めたルウが横たわっていた。

## 目覚め

「な、なに?! 誰が、殺せと命じたか!」

王の狼狽ぶりは、ただ事ではなかった。

「わしは、ルウには、今までの功もあるから、金を与え、しばしの暇を取らせようと思っていたのに…:よりによって、ナルバの部屋にて刺し殺すとは! いったい何者か! 誰の命令だ!」

ヘルビラティは王にすり寄って、ささやくように、

「うるたえあそばされるな、陛下。起きてしまったものは、どうしようもありません」

「しかし…:なんと無慈悲な…」

「卑しい側女ひとりとはいえ、科なく殺したとあっては、陛下の名に傷がつきます」

「しかし、ナルバが…」

「ナルバ様に淫らなことを教えし罪により殺した、ということにいたしましょう」

「…」

「これも、いい潮にございます。これでナルバ様は、王にふさわしく成長されましょう」

王は疲れきった様子で、玉座に座り込み、

「ナルバは…:どうしているか」

ヘルビラティは、

「ルウの死体から離れようとなされませぬ」

ナルバは、もはや涙も枯れ果てたようすで、ルウの死体のそばに立ち尽くしていた。

(ナルバよ…)

何かが、ナルバの心にささやいた。

「だ、誰？」

（私の声が聞こえるようになったか。一つ成長したな）  
ふと見ると、死体のそばには、カラスが一羽とまっていた。

「あ…あ…」

（恐れるな。私は、そなたの味方だ）

「…」

（そなたに、気高く美しいものを、ひとつ教えよう…それは、憎しみだ）

「憎しみ…？」

（そうだ。お前からルウを奪ったものを憎め。あらゆるものを憎め。今までのお前には無かったものだ）

「…」

（愛は、お前を裏切り、お前の大切なものを奪った。だが、憎しみはお前を裏切ることはない。お前の望むものをなんでも与えてくれるであろう）

「愛が…ぼくを…」

（憎しみを糧として、生き続けよ…）

そういつて、カラスはいずこかへ飛び去った。

そこへ、ヘルビラティが入って来た。

「ナルバ様、ここにおられましたか」

「…」

「おかわいそうに…お言葉もないほど、お嘆きでしょう…陛下には、さっそくルウを殺した者を突き止め、死刑にせよとのご命令にございました」

「ヘルビラティ…」

「は、はい…！」

ヘルビラティは驚愕した。王子ナルバが、初めて自分の名を呼んだのだ。

「ぼくに魔導を教えてほしい」

「おお…ありがたき幸せにございます。このヘルビラティの持つ  
るすべてを、お教えいたしましょうぞ」

ヘルビラティは心のうちで、

(ついに最初の目覚めのとかが来た…)

と、密かに邪悪なる喜びを覚えていた。

## 旅立ち

ルウの死から1年…

城中にて仕えし者たちは、密かに囁きあっていた。ナルバ王子のことである。

「ナルバ様は、どこか変わられたようだ」

「時々、お怒りを露わにされるようになった。あれほど穏やかで、悪く言えば頼りないところもあつたのに…」

「あのヘルビラティが、いつもお側に侍しているようだが…」

「魔導を学ばれているとか」

「やはりあの噂は、まことであつたか…？」

「いやいや、心の荒みがちなお年頃、ご成長あそばされている証よ」

「そうであればよいが…」

大方の予想は、半分当たり、半分当たっていなかった。

ある日ナルバは、アマンダ王、すなわち育ての父に謁見した。

アマンダ王は跪くナルバを見て、密かに、

(なにやら雰囲気が変わった)と感じていたが、勤めて大らかに、

「ナルバよ、魔導の鍛錬はすすんでおるか。余に大切な話とは、何だ」

ナルバは、

「しばらく、城を出ることをお許しいただきたいのです」

「な…なに?!」

アマンダ王はうろたえた。いつか、このような日が来るのではと案じていた。そして、できればこんな日がずっと来なければよい、と…

「なにゆえか? 城の中にいるのは、不服か」

と尋ねると、

「不服ではございません。私の血が、外の世界へ行くことを欲しているのですぞいませす」

王は、大きく息をつきながらも、

（察したのか…？ それともヘルビラティのやつに、何か吹き込まれたか）

「外へ出て、どうする？ 妃もいらぬと申すか」

「母を…私の真の母を探し出す所存です」

それを聞いて、王の背筋が凍りついた。とうとうナルバは真実を知ったのだ。

「やはり…運命には逆らえぬか」

「はい。私には、母が本当に死んだとは思えない。どこか遠いところで、生きているような気がしてならないのです」

「よかるう…ならば、自分の正体も知っていような？」

「はい。私は闇と人間との子でございます」

王は、父としての情を捨てて言った。

「されば…次に会うときは父と子ではなく、敵同士かもしれぬ。

分かっておるな？」

「はい」

ナルバの眼の光は、揺るぎなかった。

（立派になった…）

王の胸に、様々な思いが駆け巡った。

王はこみあげるものを、ぐつとこらえ、

「父として最後に、申すことがある」

「はい」

「お前は闇の子。この世界を破滅に導くことも、あるいはできよう」

「…」

「しかし、お前には心やさしきリータの血も流れておる。そしてわしと、アリサと、あの哀れなルウに育てられた。いくら闇にとら



われていても、お前は望まれ、愛されて育つたのだ。それを忘れる  
でないぞ……」

「今までのご恩、決して忘れませぬ」

ナルバは、王の間から退出した。

翌日、夜明け前……

ナルバは裏門より、独りで城を出た。

すると、カラスがどこから飛んできて、ナルバの肩にとまった。

「ゼドーか」ナルバは言った。

（うむ……もう後戻りはきかぬぞ、ナルバ）

「わかつているさ。わが師はどうした？」

（ヘルビラティは処刑される。王子によからぬことを吹き込んだ  
罪によってな。あの者はもはや不要だ）

「そうか……」

ナルバは一度だけ、思い出のつまった城を振り返った。

（では行くぞ、闇の少年ナルバよ）

ナルバはゼドーとともに歩き出した。

## ならず者

ナルバとゼドーは、アマランダの城下町へやって来た。

(とりあえず金があるな)

「そうだな」

(ナルバ、その酒場に入れ)

ナルバが酒場に足を踏み入れたとたん、ざわめきが止まった。

「おい、やけに可愛い客が来たぜ」

一人が沈黙を破ると、一斉に哄笑が沸き起こった。

王子の顔を知る者など、いるわけがなかった。

店主はグラスを磨きながら、

「ここは子供の来るところじゃないぜ。それに、カラスなんぞ店の中に…」

ゼドーと眼を合わせた店主は、一瞬凍りつき、驚愕した様子で、

「い…いや、構うことはない。カウンターにどうぞ…」

カウンターの椅子に腰掛けたナルバは、

「ミルクを」

するとまた、客たちはどっと笑った。

「酒も飲めんのに、ここへ来たか。筆おろしは済ませたんだろうな、坊や」

店主はジヨッキになみなみと新鮮なミルクを注いでよこした。

「何やら訳ありのようだが、この辺はガズの縄張りだ。関わりと面倒だぜ」

「ガスとは？」

「まあ、盗賊か、クズ連中の頭だよ。厄介ものさ」

「ここへは、よく来るのか」

「酒が飲みたくなりゃ、来るだろうな」

「ぼくがそのガズをやっつけたら、金をくれるか」

「なんだって？」

隅のほうで、がたん、と、椅子が動く音がした。

「そのガキ、痛い目に合わんうちに、出て行きな」

二人の男が、近づいてきた。

(ナルバ…ちょうどいい。小手調べだ)

「ああ」

ゼドーは、ナルバの肩から飛び去り、天井の梁にとまった。

「聞こえたのか、小僧」

背が高く、痩せているほうの一人が、ナルバの頭髪をつかみ、振り向かせた。

すると、その男は急に震えだし、その場にくずおれた。

「は…か、身体が…」

もう一人の小太りのほうが、ナルバの顔を殴ろうとした。

ナルバの瞳が一瞬、赤く輝き、黒い霧がその男を包んだ。

肥えた身体が、一瞬にしてしぼみ、枯れ枝のようになった。

敵の生命そのものを吸い取る、エナジードレインという能力であったが、闇の子であるナルバは、特にこれを得意としていた。

店主は舌を巻いた。客たちは静まりかえり、ナルバの方を見ないようにしていた。

(このガキ…いや、ガキのように見えるのかもしれないが、魔導を…)

ゼドーがばたばたと羽を鳴らして、降りてきた。

(殺してしまったか。まだまだだな)

「うん…何か聞き出せたかもしれないけど」

店主は、干からびた死体を指さして、

「二人とも、ガズの手下だよ。まずいことになったぞ」

そして、ナルバを見ながら、

(こいつ、このカラスと話しているのか?)

「あんだ、どうしてもガズをやっちまうかい」

「金になれば」

「そりゃ、ガズがいなくなりゃ、金1000は払ってもいいが…」

「それでいい。引き受けたよ」

ナルバはミルクの残りを飲み干した。

## 狂戦士の呪い

二人の死体を、ナルバと酒場の店主で、外へ運び出した。すると、ゼドーが刃物のような嘴を使って、食べ始めた。

「おえっ…君は死体を食べるのか？」ナルバが言った。

ゼドーは、

（魔將軍とて、食事はせねばならん。人間の肉など、今ではそうそう食えるものではないのでな）

「ふーん…」

（特にこの目玉が好物でな）

ガズの手下の眼球を、ゼドーが飲み込んだ。

店主は嫌悪感をあらわにしていたが、

「ん？ あれはなんだ？」

町の広場の方で、多くの人が集まっていた。

「ひいいい！ ご、ご慈悲を！ 助けてくれええ！」

甲高く泣き叫ぶ声が聞こえて、ナルバは気づいた。

「ヘルビラティ…」

ゼドーは食事を中断し、空高く舞い上がった。そして降りてくると、

（ナルバ、お前の師が、公開処刑されるところだ）

「行ってみよう」

ナルバは広場の方へ走った。ゼドーもそれに続いた。

屈強な男二人にひきすえられてきたヘルビラティは、涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにしながら、

「いやだあ！ 地獄へなど戻りたくない！」

集まった人々に紛れて、ナルバが言った。

「助けるべきかな」

ゼドーは、

(あやつは、もともとお前のために、闇より解放された者だ。用が済んだ今、闇へと帰っていくのが筋というものだ。やつは穢れきった魂の持ち主だ。人間の世界でこれ以上生きても、しかたあるまい)

「…」

ナルバは、まさに今、首をはねられようとしているヘルビラティをじっと見ていた。

すると、突然、泣き叫んでいたヘルビラティが、冷静さを取り戻し、

「きさまの思い通りにはさせんぞ！」

と叫び、口から黒い霧のようなものを吐き出した。

「ナルバよ！ これできさまは終わりだ！ きさまの兄ゼノンを呪ってやるぞ！」

黒い霧は、生き物のように、城のほうへ向かって飛んでいった。

(むっ？ あれは…)

「兄上を呪うだって？」

次の瞬間、ヘルビラティの首は落ち、血がほとばしった。

(厄介なことになった。ナルバよ)

「なんだ？ 今のは」

(狂戦士の呪いだ。お前の仮の兄ゼノンは、剣の達人だったな)  
「うん…そうだ」

(すぐに、ではないが、ゼノンはいずれ人の心を失う。生きている限り殺戮を求める狂戦士となるう)

「なんだって…」

(いずれ我らを追いかけてくるだろう。我らは、強力な剣士に対しては無防備だ)

「どうしたらいい？」

(先程、酒場で聞いた、ガスとかいう者だが…殺さず、利用した方がいいかもしれんな)

ナルバははるか遠くに見える、アマンダ城を見やっ  
て、「兄上……」とつぶやいた。

## ベストナ

「なに？ ガキひとりに、やられただとお？」

ガズはひどく機嫌が悪かった。腰巻ひとつの格好で、ねぐらから起きだしたとたん、自分が転がりこんできて、酒場での一件を伝えたのだ。

「親分、お、おれも初めて見たが…ありゃあ魔導だ」

「なに、魔導だと？」

「そ、それに、気味悪いカラスが一緒だ…普通のガキじゃねえ」

「魔導といやあ…王族か、ゾムドの町から来たのか、どちらかだが…まさか王族のわけはねえが、そんな奴がうるついていちゃ、なにかと不都合つてもんだな」

ガズは毛深い身体にローブをはおると、酒を食事を持ってくるように言いつけた。

「ふう…」

ガズは巨大な体躯を、綿を入れた椅子に下ろした。昨日の酒が、まだ残っている。

「無用心ね、ガズ」

背後から女の声があった。

そのとたん、ガズはいつぺんに酔いが醒めてしまった。

「あ…あんたか、ベストナ」

闇から湧いて出たように、背後にすらりと背の高い女が立っていた。

髪を後ろで束ね、細い剣を佩き、無駄な肉のない身体を、紫の武闘着で包んでいた。

剣も、素手での組み合いも、どちらもかなりの腕前であることは、容易に想像できた。

そしてその眼を見れば…数々の修羅場をくぐった戦士であることも、明らかであった。



「あんたを殺したがってる奴は大勢いるよ、ガズ」ベストナは言った。

「ただ、その坊やは、その中でもかなり厄介な奴だ。エナジードレインで二人も殺せるとなると、もしかしたら魔界とつながりがあるのかもね」

「あんたなら、殺せるか？ そのガキを」

「真つ向から当たったんじゃ、無理だろうね」

「そんなに手強いのか」

ベストナは意味ありげに、

「女の武器を使って、骨抜きにすることなら、できるかもしれないね」

「そうか、そして、味方につけることができれば…」

「そううまくいくかどうか、わからないけど…あんたの手下を何人送り込んだって、無駄に殺されるだけだろうね」

手下の一人が、大きな肉と、酒を持ってきた。

「あんたに任せよう、ベストナ」

ベストナは心中で唾棄しながら、ガズのねぐらから出ていった。

（阿呆が…）

酒場のほうへ戻ってきたナルバに、ゼドーが言った。

（お前にまだ教えていないことがあった）

「なんだい？」

（肉欲だ。つまりは女の身体だよ）

ナルバは言葉に詰まってしまった。

（女を買うぞ。金はないから、エナジードレインで軽く弱らせる。逃げられないようにしてから、奪ってしまえ）

「そ、そんな事…」

（ちようどいい。あそこに、さっきからこっちを見ている女がいる。見たところ娼婦ではないようだ…）

ベストナは、すぐにナルバと、不気味なカラスを見つけた。

（あいつか…）

ベストナは、久しぶりに、女としての自分と、戦士としての自分の血がたぎるのを感じていた。

（ふふ…身も心も、あたしのものにしてやるっ）

## 仲間

ベストナはナルバが近づいてくるのを見て、

(なんだい、ありや。育ちのいいお坊っちゃん、てところだね。よっぽど薄気味わるい、アブないやつかと思っただのに)

ナルバは、ベストナの前へ来ると、

「ぼくと、寝て欲しい」と平然と言った。

ベストナは一瞬、呆気にとられ、それから吹き出した。

「ぶはは…坊や、もしかしてあたしを口説いてるのかい」

「口説く？」

ナルバはきよんとしていた。

(こんな奴だとは、思わなかったよ)

ベストナは、ナルバの手首をつかむと、

「おいで、大人の礼儀つてやつを教えてやるよ」

その瞬間…

「お…おんな…の…あ…」

舌が回らなくなった。

(か、身体に力が…)

ベストナの手が、ナルバから離れた。ベストナはその場に倒れた。

「これでいいの？」

(ちよつと過ぎたな…うん?)

「どうした、ゼドー？」

(女、私の声が聞こえるか。聞こえたら、瞬きを三度しろ)

ベストナは言われるがまま、瞬きを三度した。

(ナルバ、この女は私の声が聞こえるようだ)

「きれいな人だね」

ベストナは、呼吸と瞬きしかできないほどの状態だった。

(私はゼドーだ。この少年とともに、旅に出たばかりだ)

ベストナは青ざめた。

殺される…

(詳しい話は、術が解けてからにするか)

「触られただけで死んじまうんじゃ、女を教えるどころじゃないよ」

ベストナはようやく口がきけるようになったが、まだ震えていた。

「ベストナ、ガズを殺せるかい」

ナルバが訊くと、

「造作もないけど、あたしはもう、この町にはいらなくなるよ」

(そこで、相談だ。ガズを倒せば、金10000が手に入る)

ゼドーが言った。

「へえ…」

(我々は旅の途中だが、お前が仲間に加わってくれれば、心強い)

「いいよ。どうせ根なし草だ。あんた達と一緒になら、食いつばぐれることもないだろうしね」

「あまり楽しい旅とはいえないけど…よろしく、ベストナ」

ナルバは握手しようとして、あわてて引込めた。

「よしとおくれよ…今度こそあたしは、ババアにされちまうよ」

翌日、酒場のカウンターに、大きなものがどすんと置かれた。

ベストナは、

「ガズの首だ。確かめな」

店主は腰を抜かしたようにしていたが、

「そ、そうだ。これは確かにガズだ」

「さつさと金1000をよこしな」

こうして、二人と一羽は、旅のための金を手に入れたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4620x/>

---

闇の少年ナルバ

2011年10月20日09時14分発行